

教職科目「教職論」のカリキュラム開発に関する一考察(I)

—大学のテキスト分析を中心として—

田代直人、佐々木司¹、金田重之²、川野哲也

A Consideration on the Curriculum Development of Teacher Training Courses: Analyses of the Textbooks for “Introduction to the Teaching Profession”

Naoto TASHIRO, Tsukasa SASAKI, Shigeyuki KANEDA, Tetsuya KAWANO

研究の目的・方法

大学における講義内容は、各講義担当者の判断に委ねられている。このことは各担当者の独自性を発揮できる利点を有するものである。他方、講義内容が担当者の研究成果のみに依存したり、視野の狭いものになる恐れがある。本研究ではこの点を踏まえ、教職科目である「教職論」（「教職概論」等の名称もある）にスポットをあて、カリキュラム開発の観点から、講義担当者が講義内容を標準化する上での、資料を提供し、参考に供することをねらいとしている¹⁾。

カリキュラム開発に当たっては、講義内容を網羅しているシラバスを分析することも有効であるが、本研究ではテキストの分析を行い、上記の研究目的を満足しようとするものである²⁾。具体的には①テキストの章の分類と典型的と思われるケースの紹介、②索引項目の分類、③テキストとして工夫されていると考えられる点の提示にある。本研究を進めていく上で、特に＜参考文献＞①に示す大庭茂美氏の論文は貴重な先行研究であり、参考となった。

本研究における分析対象のテキストには、以下のように便宜的に番号をつけ、著者、タイトル、発行所、発行年月を示した。なお、テキストの設定に当たっては、特定の視点からではなく、入手可能なものとした。

- 【1】 西林克彦ほか編『教師をめざす』新曜社、2000年3月
- 【2】 伊藤 敬編『21世紀の学校と教師—教職入門』学文社、2000年3月
- 【3】 田井康雄編『教育職の研究—教師を志すことの意義—』学術図書出版、2001年4月
- 【4】 山崎英則・西村正登編『求められる教師像と教員養成』ミネルヴァ書房、2001年6月
- 【5】 米山 弘編『教師論』玉川大学出版部、2001年3月
- 【6】 谷田貝 公昭・林 邦雄・成田 國英編『教師論』一藝社、2002年5月
- 【7】 蔵元 幸二・半田 博編『21世紀の教職—生きる力を育む』つなん出版、2002年3月
- 【8】 日本教師教育学会編『教師とは—教師の役割と専門性を深める』学文社、2002年10月
- 【9】 伊藤 一雄・北川 一幸・溪 逸哉『教職への道標—現場で役立つ教職概論』サンライズ出版、

¹ 山口大学教育学部

² 山口芸術短期大学

2004年2月

- 【10】 佐島群巳・黒岩純子編『教職論—教師をめざす人のために』学文社、2005年1月
- 【11】 土屋 基規編『現代教職論』学文社、2006年3月
- 【12】 秋田 喜代美・佐藤 学編『新しい時代の教職入門』有斐閣、2006年4月
- 【13】 大津 尚志・坂田 仰編『はじめて学ぶ教職の基礎—教師になることを考えるあなたに』協同出版、2006年11月
- 【14】 中野 啓明編『現代の教職原理』考古堂書店、2007年3月
- 【15】 篠田 信司『教職の意義と教員の職務』（第3版）三省堂、2008年1月
- 【16】 小笠原道雄ほか編『教職概論』福村出版、2008年3月
- 【17】 田中 耕二郎・井ノ口 淳三編『教職概論—教師になるには』ミネルヴァ書房、2008年5月
- 【18】 秋山 弥監修、作田良三ほか編『新版 教師の仕事とは何か—スキルアップへのファースト・ステップ』北大路書房、2009年2月
- 【19】 佐々木 芳輝『必携 教職入門—先生のための教科書』本の森、2008年1月
- 【20】 赤星晋作編『新教職概論』学文社、2008年10月
- 【21】 教職問題研究会編『教職論—教員を志すすべてのひとへ』（第2版）ミネルヴァ書房、2009年3月
- 【22】 田井 康雄編『新教育職の研究—新たな教育環境に生きる教師のあり方』学術図書出版社、2009年4月
- 【23】 武安 宥・角本 尚紀編『教職概論』昭和堂、2009年3月
- 【24】 長尾 和英編『教職と人間形成』（第2版）八千代出版、2009年4月
- 【25】 柴田 義松・山崎 準二編『教職入門』（第2版）学文社、2009年4月
- 【26】 教職課程研究会『教職必修 新教職論』（改訂版）実教出版、2009年6月
- 【27】 古橋和夫編『改訂教職入門—未来の教師に向けて—』萌文書林、2009年11月
- 【28】 石村 卓也『教職論—これから求められる教員の資質能力』（改訂版）昭和堂、2010年4月
- 【29】 佐藤 晴雄『教職概論—教師を目指す人のために』（第3次改訂版）学陽書房、2010年4月
- 【30】 佐藤 徹編『教職論—教職につくための基礎・基本』東海大学出版会、2010年3月
- 【31】 新井 保幸 江口 勇治編『教職論』培風館、2010年5月
- 【32】 姉崎 洋一・大野 栄三・近藤 健一郎編『教職への道しるべ』八千代出版、2010年10月

I. テキストの章の分類

上記のテキストのうち、ここでは形式上の都合によりテキスト番号【8】、【14】をのぞく。従って、ここでの分析対象のテキストは30冊である。

テキストを分析し、章の分類を試みたところ、およそ次のような15に分類することができた。以下、典型的な事例や参考に値すると思われる章を紹介するとともに、分類の2～14に関してはテキストの冊数とともにその分析テキスト全体に占める割合を提示することとした。冊数の提示に当たっては、章のタイトルの一部にでも該当する標記があれば1冊として計算することとした。

また同一テキストに該当する標記の章が複数ある場合は1冊とした。さらに分類に当っては章のサブタイトルも視野に入れることとした。テキストの中には「部」のもとに「章」を設けているケースも見られたが、この場合は「章」のみに着目することとした。

1. 教育（学）一般

概ね教職に関する章を除く、教育（学）一般に関する章であり、①教育の目的、②教育の方法、③学校の制度、④その他、に分けて紹介する。

①教育の目的

- ・教育の目的【23】

②教育の方法

- ・授業をつくる【12】
- ・授業を創る【25】
- ・教育方法と技術【23】

③学校の制度

- ・日本の学校教育の歴史【30】

④その他

- ・子どもと社会変化【1】

2. 教職の意義

- ・教職の意義【28】【29】
- ・教職の意義と役割【20】
- ・教職の意義と教育者論【24】

章として「教職の意義」の標記が見られるテキスト数は8冊であり、分析した30冊に占める割合は26.7%であった。

3. 教師像

- ・教師像の変遷【31】
- ・求める教師像【32】
- ・教員養成制度と求められる教師像【13】
- ・現代的課題と求められる教師像【24】
- ・教師像の類型【4】
- ・教職観と理想の教師像【29】

章として「教師像」の標記が見られるテキスト数は8冊（26.7%）であった。

4. 教師の資質（能力）

- ・教師の資質能力【6】
- ・いつの時代も教師に求められる資質・能力【7】

- ・今後、教員にも求められる資質能力【15】
- ・教員の資質と能力【17】
- ・教員と資質【19】

章として「資質（能力）」の標記が見られるテキスト数は13冊（43.3%）であった。

5. 教職の専門性

- ・教師の専門性【3】
- ・教職の専門性【12】
- ・教職の専門性と研修【27】

「専門性」の標記が見られるテキスト数は4冊（13.3%）である。

6. 教師の教育活動（学級経営を含む）³⁾

- ・教諭の教育活動の実際【26】
- ・教員の職務Ⅰ【13】
- ・教科指導と教師【31】【32】
- ・音楽教育の実践的指導力をのばすために【7】
- ・特別活動と教師の仕事【32】
- ・「道徳教育」を担う教師【16】
- ・進路指導と教師【32】
- ・生徒指導の理論と実践【23】
- ・学級集団【1】
- ・教師と学級づくり【11】

テキストの冊数については、以下のように小分類して提示することとした。

- ①「教育活動一般」：4冊（13.3%）。なお、「職務」、「仕事」、「役割」等の標記の章も見られたが、その節の内容から判断して概ね「教育活動一般」の範疇に入るものも加えた。
- ②教科指導：3冊（10.0%）。
- ③生徒指導（生活指導を含む）：7冊（23.3%）
- ④特別活動：3冊（10.0%）
- ⑤道徳教育：3冊（10.0%）
- ⑥進路指導：2冊（6.7%）
- ⑦総合的な学習の時間：2冊（6.7%）
- ⑧学級経営：4冊（13.3%）

ここでは2冊以上のテキストに関して紹介した。

7. 学校経営（教育課程の編成を含む）

- ・学校の管理・運営と教師【18】
- ・学校の組織と学校経営【28】

- ・校務分掌と職員会議【24】
- ・スクール・リーダーとマネジメント【13】
- ・教育課程づくり・学校づくり【11】
- ・教育課程の意義と編成の方法【23】

章として「学校経営」（内容的に学校経営に分類される章を含む）関係の標記の見られる冊数は14冊であり、46.7%を占めた。「教育課程」に関しては4冊（13.3%）であった。

8. 教師と保護者・地域住民との連携⁴⁾

- ・学校・家庭・地域社会の役割と連携【15】
- ・学校の再生と家庭・地域との連携【32】
- ・変容する子ども、家庭、地域【7】
- ・親と教師の人間関係【6】
- ・学社連携と教員の役割【13】

章として「教師と保護者・地域住民との連携」に関するテキスト数は9冊であり、その割合は30.0%であった。

9. 教員の任用・勤務・服務・身分

- ・教員の任用と服務【29】
- ・教員の身分と服務義務【15】
- ・教員の職務と身分【3】
- ・教員の勤務と服務【26】

章として「教員の任用・勤務・服務・身分」に関するテキスト数は13冊、全テキストに占める割合は43.3%であった。

10. 教員養成

- ・教員の養成【6】
- ・戦前の教員養成【4】
- ・戦後の教員養成【4】
- ・教員養成カリキュラムの在り方【31】
- ・これからの学校と教員養成【2】
- ・教職大学院の意義と課題【22】
- ・教職大学院制度の樹立—教師教育の現状と課題【16】

章としての「教員養成」関係のテキスト数は16冊（53.3%）であった。

11. 教育実習

- ・教育実習【3】【11】
- ・教育実習の意義と心得【29】

- ・教育実習と介護等体験【20】

章として「教育実習」の標記の見られるテキスト数は5冊（16.7%）であった。

12. 研修

- ・教師の研修【3】【22】
- ・教員の資質向上と研修【28】、【29】
- ・教員のライフステージに応じた研修制度とその内容【15】
- ・研修と教師の成長【11】
- ・教員の研修【7】、【26】

章として「研修」の標記の見られるテキスト数は、16冊（53.3%）であった。

13. 教員の免許・採用試験

- ・教員免許制度【20】
- ・教員免許更新制の意義と問題点【22】
- ・教員採用試験【28】
- ・教員採用選考試験【10】

章として「教員免許」関係の標記の見られるテキストの数は4冊（13.3%）、そして「採用試験」については8冊（26.7%）であった。

14. 教職関係法規（学習指導要領を含む）⁵⁾

- ・教員に関する法規【13】
- ・教師をめぐる法律【27】
- ・教師の法制上の地位と役割【2】
- ・教育内容と学習指導要領【24】
- ・新世紀最初の学習指導要領の役割【26】

章として「教職関係法規」関係の章を設けているテキスト数は4冊（13.3%）、「学習指導要領」については3冊（10.0%）であった。

15. その他

概ね教職に関する章であり、上記の分類の範疇外であると考えられるものである。ここでは①一般的なもの、②学校種ごとの実践的なもの、③教師の歴史、④ユニークなものに分けて紹介する。なお、ここではテキストの冊数は提示しない。

①一般的なもの

- ・教師になるためのガイド【1】
- ・現代社会における教師の現状【4】
- ・21世紀の教師【5】
- ・教育行政と教職【24】

- ・生涯学習時代の学校と教師【2】
- ・教員評価【20】
- ②学校種毎の実践的なもの
 - ・幼稚園の教諭生活の実際【4】
 - ・小学校の教諭生活の実際【4】
 - ・中学校の教諭生活の実際【4】
- ③教師の歴史
 - ・人類の教師【5】
 - ・西洋の教師【5】
 - ・日本の教師（1）（2）【5】
 - ・日本における教師の歴史【27】
- ④ユニークなもの
 - ・子育てと女性教師【2】
 - ・教師のメンタルヘルス—実践への誘い—【10】
 - ・教師のライフコース【31】
 - ・教師集団と教師文化【2】

Ⅱ. 索引の分析

章・節の他に「索引」も、テキスト分析を行う上で有用なものである。いうまでもなく索引は、テキスト内に記述された語句のうち、重要と執筆者が判断したものが巻末に掲載されたものであり、テキスト内容を構成する「キーワード群」といった性格を帯びている。

もっとも、索引によってテキスト分析を行おうとした場合、不都合な点や問題が3点ある。まずそれに言及しておきたい。

第1点は、すべてのテキストが索引を掲載してはいないことである。章・節が存在しないテキストはないだろうが、索引をもたないものはめずらしくはない。本調査でも、テキスト32冊中、【6】【7】【13】【15】【17】【19】【25】の7冊には索引がなかった。

第2点は、索引が掲載されている場合でも、語句を索引としてピックアップする基準は一様でないであろう点である。索引掲載テキスト25冊には、延べ6,491項目の索引項目が掲載されていた（1冊平均260項目）。各テキストの索引項目数は次のとおりである。

【1】396項目、【2】190項目、【3】240項目、【4】302項目、【5】461項目（最多）、【8】226項目、【9】108項目、【10】258項目、【11】162項目、【12】260項目、【14】311項目、【16】232項目、【18】111項目、【20】130項目、【21】353項目、【22】177項目、【23】359項目、【24】419項目、【26】276項目、【27】232項目、【28】242項目、【29】400項目、【30】326項目、【31】256項目、【32】64項目（最少）

第3点は、本文を読まなければ、索引項目として掲載してある語句がテキスト中どのような文脈で、何を言わんがために用いられたのかわからない点である。索引それ自体はコンテキストを説明はしてくれない。また、索引項目がテキスト中で数度に渡って、それぞれ異なるコンテキストで使用されることもあり得る。

以上の問題を認識しつつも、ここでは索引のある25冊について、索引としての採用基準や使用コンテキストについては考慮せず、むしろ機械的に分析を行った結果について述べていくこととする。

出現冊数8冊以上の項目（8冊以上のテキストに「索引」として掲載されていた項目）をすべて列挙したのが表1である。この表から、共通性の高い索引項目（すなわちテキスト内容を示すキーワード）をおおよそ知ることができる。表の見方は次のとおりである。

例えば、一番上に記載している「学習指導要領」という項目は、25冊中19冊で索引として掲載されていた。それから、表記には若干の違いがあるものの、同一性が高いと思われる項目の場合には、代表する項目でまとめ、それ以外のものを――→として例示した。上から二番目の「開放制」の「出現冊数」の欄には18(9)とある。これは、厳密に「開放制」という索引に限れば9冊であったが、それに「開放性」「開放制教員免許制度」など類似の表現を合わせると18冊になることを意味している。どのような項目をまとめるべきかについては、恣意的にならないよう配慮しつつ、筆者の判断で行った。

表1 索引項目と出現冊数（8冊以上）

出現冊数	項目	類似表現等
19	学習指導要領	
18(9)	開放制	――→ 開放性 開放制教員免許制度 開放性教員養成 開放制の教員養成 開放制の原則 開放制免許制度 開放制免許制度 開放的な免許制度 開放的免許制度
18	教育基本法	
18	学校教育法	
18(16)	教育職員免許法	――→ 教育職員免許法（免許法）
17(15)	初任者研修	――→ 初任者研修（新規採用教職員の研修）

			初任者の研修
15(14)	教育公務員特例法	→	教育公務員特例法（教特法）
15	師範学校		
15(1)	職員会議	→	職員会議の機能
15(1)	特別免許状	→	特別免許状制度
14	生きる力		
14(8)	介護等体験	→	介護等体験（教特法） 介護等体験特例法 介護等の体験
14	学級経営		
13(12)	学級崩壊	→	学級崩壊現象
13(3)	聖職	→	聖職（者）論 聖職観 聖職者 聖職者・労働者論争 聖職者教師 聖職者教師像 聖職者的教師観 聖職者論
13	生徒指導		
13	専修免許状		
13	総合的な学習の時間		
12	教育課程		
12	校務分掌		
12(11)	中央教育審議会	→	中教審
12	不登校		
12	臨時免許状		
11	いじめ		
11	教育職員養成審議会	→	教育職員養成審議会（教養審）

11(10)	教員免許更新制	→	教員免許状更新制度
11	校長		
11	普通免許状		
11(5)	一斉授業	→	一斉教授法 一斉指導 一斉指導法 一斉授業方式
10(7)	カウンセリング・マインド	→	カウンセリングマインド カウンセリングマインドによる接し方 カウンセリングマインドの対象 カウンセリングマインドの目的
10	学制		
10	指導力不足教員		
10	バーンアウト		
10	森有礼		
10	臨時教育審議会	→	臨教審第2次答申 臨時教育審議会（臨教審）
9	10年経験者研修	→	10年経験者研修制度
9	学習指導		
9	学習指導案		
9	教育実習		
9	教員の地位に関する勧告		教員の地位に関する勧告（1966年）
9	教師		
9	教頭		
9	師範学校令		
9	特別活動		
9	日本教職員組合		日本教職員組合（日教組）
9	ペスタロッチ	→	ペスタロッチー ペスタロッチ（Pestalozzi,J.H.） ペスタロッチー主義
8	キャリア教育		

8	教育公務員		
8	教科指導		
8	教職大学院	→	教職大学院制度
8	研修		
8	資質能力		
8	実践的指導力		
8	主任		
8	生活指導		
8	全体の奉仕者		
8	体罰		
8	懲戒		
8	ティーム・ティーチング	→	ティーム・ティーチング (T.T)、 ティームティーチング
8	デューイ	→	デューイ (Dewey, J.)
8	寺子屋		
8	保健主事	→	保健主事 (主任)
8	養護教諭		
8	ルソー	→	ルソー (Rousseau, J.-J.)

筆者は、先に教職科目「生徒指導」のテキスト分析を行い、索引の出現冊数等についても同様の調査を実施している（【注】の1）を参照のこと）。その結果を用いながら、「生徒指導」との比較から「教職論」の特徴について記述してみたい。

「生徒指導」の場合、分析対象テキストは13冊であり、そのうち索引が掲載されていたものは10冊であった。最も出現冊数が多かった索引項目は「カウンセリング」（9冊）である。これに対して「教職論」では25冊中19冊の「学習指導要領」が最多であった。最も出現冊数の多い項目についてみれば、「生徒指導」が10冊中9冊、「教職論」が25冊中19冊ということになり、「生徒指導」の方が共通性は高いと見ることができる。

図1と図2は、それぞれ「教職論」と「生徒指導」の索引項目出現冊数の割合を表した円グラフである。これを見ると、1冊だけに出現している項目の割合は、「教職論」が56%、「生徒指導」が69%である。ともに検索項目は広く分布しており、その分、テキストごとに多様な内容が扱われていることが見てとれる。また、「教職論」の索引で出現冊数が8冊以上であった項目のうち、

「学習指導要領」、「学級経営」、「学級崩壊」、「カウンセリング・マインド」、「生活指導」は、「生徒指導」のテキストにおいても出現冊数上位の項目であった。

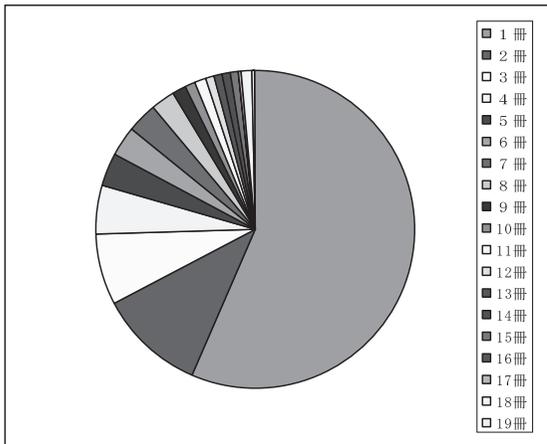


図1 「教職論」索引項目出現数

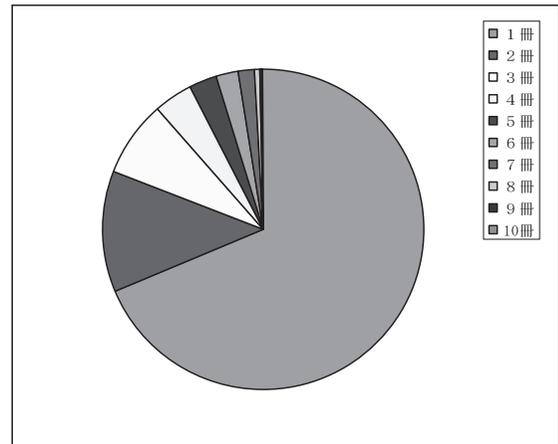


図2 「生徒指導」索引項目出現数

表1には全部で64項目あり、「出現冊数」が多い順に「学習指導要領」(19冊)、「開放制」(18冊)、「教育基本法」(18冊)、「学校教育法」(18冊)、「教育職員免許法」(18冊)、「初任者研修」(17冊)と続くわけだが、特に上位の項目は法規や制度的内容であることがわかる。他にも、戦前の歴史的内容や歴史的人物が目につく。

そこで、「教職論」の索引項目のうち、出現冊数の多いものを概観し、それら索引項目を主要と思われる「法規」、「制度」、「人物」、「歴史」の4カテゴリーに区分してみた。各カテゴリーで上位5項目を掲載したのが表2である。

表2から注目されるのは、先ほども述べたように「法規」と「制度」の2カテゴリーの冊数が多い点である。教職論のテキストにおいて、我が国の教育に関する法規や制度が比較的共通に取り上げられていることがわかる。先に見たように、出現冊数が1冊という項目が全体的に見れば多いわけであるが、そうした拡散した状況にあっても「共通的な項目(共通性)」を見て取ることはできる。その中核を成しているのが、法規や制度に関する項目であることがうかがわれる。

表2 カテゴリー別にみた上位5項目

カテゴリー	項目(冊数)
法規	学習指導要領(18)、教育基本法(18)、学校教育法(18)、教育職員免許法(18)、教育公務員特例法(15)
制度	開放制(18)、初任者研修(17)、職員会議(15)、特別免許状(15)、介護等体験(14)
人物	森有礼(18)、ペスタロッチ(9)、デューイ(8)、ルソー(8)、ソクラテス(7)
歴史	師範学校(15)、学制(10)、師範学校令(9)、寺子屋(8)、教育勅語(6)、教育令(6)

次に目を引くのが、歴史上の人物（森有礼やペスタロッチなど）や歴史的事項（師範学校、学制、寺子屋など）に関する項目の多さである。もちろんテキスト内には今日的な出来事や存命中の教育実践家などが記述されていることもあるのであろうが、あくまで索引からみる限り、古い時代の人物、歴史的事項に関する項目は「共通性」が高い。

Ⅲ. 工夫されているテキストの事例紹介

次に、テキストにおいて工夫されている点に関して、幾つかの視点から紹介してみよう。

第1点目として、テキストの第1章に着目してみた。「教職論」は山口学芸大学や山口大学教育学部の例に見られるように、1年生対象の講義が適切であると思う。その場合、いきなり教職論を展開するには無理があるように思う。この点を踏まえて、テキストの第1章を眺めてみると、例えばテキスト番号【1】では「子どもと社会変化」との章のタイトルのもとに、①「学級崩壊」という現象から、②子どもが育つ環境の変化—筆者自身を事例に、③変わるものと変わらないもの—教師対象の聴き取り調査から、④社会のなかの子ども—学校と子どもの関係の変化、との節から構成されている。また、テキスト番号【23】は、「教育の原理」を第1章に設定し、①教職研究の基本的態度、②教育とは何か、③教育と人間、④学校とは何か、⑤教育される者と学校教育、⑥学校教育と教育的価値、⑦教育愛の実践場所、⑧美にして善なる正義の世界、の8節だてとしている。なお、執筆者の一人田代は山口学芸大学の「教職概論」の最初に山口大学教育学部附属光小学校校長の経験を踏まえて、「小学校の1年～学校行事等を中心に教職について考える」とのタイトルの下に、2コマ分、講義している。

第2点目として、講義と直結したテキストの事例を紹介したい。典型的なケースとして、テキスト番号【19】の全章を紹介してみよう。第1章「学生と教員免許」、第2章「自己紹介と教育」、第3章「教員と資質」、第4章「学習と子ども」、第5章「道徳と学校教育」、第6章「特別活動と人間教育」、第7章「子どもと社会人形成」、第8章「生きることと進路」、第9章「子どもの生活」、第10章「生徒指導と関係機関」、第11章「教育行政・地域社会・家庭・教師」、第12章「講義を終えて」である。これらの事例のように講義と直結したテキストは、講義における学習効果を高めていく上で有効であると思う。

第3点目として、「演習方式」のテキストとして編集・執筆された事例が見られたことである。テキスト番号【15】がそれである。このテキストは「ワークシート」と「解説資料」から成っている。「ワークシート」は、章ごとに自分の考えをまとめる<設問>と設問で考えたことを話し合ったり、発表したりする<指示>の両方で構成されている。また「解説資料」は、各章に合わせて関係資料が提示されている。正に受講学生が自ら主体的に考え、十分に理解できるように工夫されたテキストとであるといえよう。なお、このテキストも第2点目で紹介した講義と直結したケースの典型でもある。

第4点目はコラム等を設けているテキストの例である。テキスト番号の【25】では、コラム①「親と子育ての想いを共有しながら」、コラム③「青年期におけるキャリア教育の実践」など10項目を設けている。テキスト番号【30】は「教師十戒」、「携帯電話と情報モラル教育」など13

のコラムに加え、「教師は五者たれ」、「金八先生タイプ」など9項目の教職雑学コーナーを設定している。

その他、工夫されているテキストのケースを簡単に紹介しておこう。①授業時間との関係で内容設定されているテキストとして、上記のテキスト番号【15】がある。このテキストでは講義の回数を15回として編集されている（この点は明記されている）。②文字ばかりでなく、視覚に訴え学習効果を高める試みとして、イラスト、写真、図を挿入しているケースが見られる。テキスト番号【2】、【4】、【10】、【19】、【27】などである。③各章の末尾に学習（研究）課題を提示している事例がないかどうかを確かめたところ、テキスト番号【16】、【28】、【30】などで見受けられた。また、テキスト番号【12】や【32】では学習を深めるための参考文献を「読書案内」、「ブックガイド」との見出しで、簡単な解説付きで紹介している。

総括

以上、本研究のねらいに沿って、まずテキストの分類と典型的事例を紹介し、次に索引の分析を行いその傾向性に関して指摘してきた。最後にテキストにおいて工夫されていると思われる点について言及した。

本研究の課題としては、①教職の意義、専門性、教師像などの内容の分析、②他の教職科目との関係一体系化の問題、③執筆者の属性（研究職、小・中学校等の実践者）や単著・共著とテキスト内容の比較分析などである。

関係のテキストを自分で収集し、参考にする作業は面倒である。この点からも本稿が関係者の方々に幾分でもお役に立てば幸いである。なお、分類作業を行いつつ、この作業にかなりの困難を痛感させられたが、このことは本研究の限界といわねばならないであろう。

【注】

- 1) 本研究に先立って、田代直人・佐々木司「教職科目「生徒指導」のカリキュラム開発に関する一考察～大学のテキスト分析を中心として～」山口大学教育学部附属教育実践総合センター『研究紀要』第25号（2008年3月）を公表している。
- 2) カリキュラム開発の一環として、①田代直人・佐々木司編著『教育の原理—教育学入門—』ミネルヴァ書房（2006年3月）、②田代直人・佐々木司編著『新しい教育の原理～現代教育学への招待～』ミネルヴァ書房（2010年3月）などの大学の講義用テキストを公刊している。
- 3) 学級経営は教育活動だけでなく、条件整備的な面もあるが、あえてここに分類した。
- 4) 「教師（学校）と保護者（家庭）・地域住民（地域の関係機関・団体を含む）」とすべきであるが、ここでは簡潔な標記とした。
- 5) 教育法規を広義に解釈し、学習指導要領をここに分類することとした。また、この分類は9「教員の任用・勤務・服務・身分」と内容的に重複する部分があるが、標記上の形式に従い、独立した分類とした。

参考文献

- ①大庭茂美「『教職論』教科書の比較研究」『九州女子大学紀要 人文・社会科学編』第41巻、第3号、2005年。
- ②高橋英児、榊原禎宏、大和真希子「教員養成の教育内容・方法の共通性・多様性と大学教員の職能開発(1) —「現代教職論」を事例にして—」『教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第9号、2004年。
- ③榊原禎宏、高橋英児、大和真希子「教員養成の教育内容・方法の共通性・多様性と大学教員の職能開発(2) —「現代教職論」を事例にして—」『教育実践学研究：山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要』第10号、2005年。
- ④一色尚「教職の意義と責務 —『教職概論』の授業展開—」『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』第1号、2004年。
- ⑤清水 正樹「『教職概論』授業の目的と展開」『東大阪大学・東大阪大学短期大学部教育研究紀要』第2号、2005年。
- ⑥霜川正幸、村上清文、岸本憲一良ほか「教育学部入学生の教職キャリアに対する意識の違いについて～教職スタート科目「教職概論」の授業改善に向けて～」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第31号、2011年。
- ⑦霜川正幸、村上清文、岸本憲一良ほか「学生の授業満足度から見た授業形態と内容のあり方について～教職スタート科目「教職概論」の授業改善に向けて～」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第31号、2011年。